The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハイデガーにおける根拠の問題 : 存在一般への問いを巡って
Author(s)	山本, 幾生
Citation	年報人間科学. 1985, 6, p. 65-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12564
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八五年二月〕
『年報人間科学』第六号　六五頁―八一頁

ハイデガーにおける根拠の問題

―存在一般への問いを巡って―

山本幾生

ハイデガーにおける根拠の問題

——存在一般への問いを巡って——

一

『存在と時間』「前半部」を公刊したハイデガーは、その二年後の『根拠の本質について』の中で現存在の超越を根拠づけ（Gründen）として捉える。根拠づけは根拠を指向し、根拠を発現させる。根拠を発現させる根拠づけは、したがって、根拠の本質である。ハイデガーは根拠の本質を解明することによって、存在一般の根拠性格を明らかにし、存在を根拠として思索しようとする（GA26, 211 Amm. 3）。これは同年の『形而上学とは何か』の末尾に挙げた形而上学の根本の問い「なぜ存在者が一般に存在し、むしろ無が存在しないのか」に対して自ら答える試みとして理解できよう。しかしそれは満足のゆくものではなかった。二つの問題が残されている。根拠の分散と根拠の遡行とに関する問題である（GA26, 278）。ハイデガーはこれら二つの問題は根拠の本質を解明する時に「なぜ」という問いそれ自体から生じて来る問題だとする。

我々は「なぜ」と問う。これに対して「なぜ、なぜなのか」と反問される。この場合に、反問の「なぜ」は最初の「なぜ」に基づいている。つまり最初の「なぜ」の本質は反問の「なぜ」を規定することにある。これは後になって次のようにも語られている。「この問い〔形而上学の根本の問い〕を問うことは全体としての存在者と向かい合って歩むが、かといってそれから身を引き離しているわけではない。そうしていると、この問いで問われているものは問うことそれ自体へ打ち返して来る。なぜ、なぜなのか。全体としての存在者をその根拠へ据えることを自負しているなぜの問いそれ自体の根拠はどこにあるのか」（EM, 4）。問われているものの問うことそれ自体への打ち返し、これは根拠の本質に対して二つの問題を提起した。根拠づけは三重の仕方——創設（Stiften）、地盤獲得、基礎づけ（Begründen）——に分散し、それぞれ超越論的根拠——可能性、地盤、証し——を発現させる。ここで、問われているものの打ち返しは根拠の遡行の問題として現われる。すなわち、根拠づけから発現した三つの根拠は、根拠づけそれ自体へ向かって遡行する。つまり自らの源に還る。なぜこのような遡行が生じるのか。また、遡行において三つの根拠の統一的起源は根拠づけにあることになる

が、それにもかかわらず根拠づけは三重に分散している。では根拠づけの三分散の統一的起源はどこにあるのか。

ハイデガーはこれら二つの問いに答えていない。これに対して本稿では、根拠の溯行と根拠づけの三分散の統一的起源とが根拠の本質への問いのどの地点で問題として生じて来たのか、これを明らかにしようと思う。というのは、これら二つのものこそ根拠の本質への問いおよびこの時期の存在一般への問いを或る困難に陥れた問題だと思われるからである。

二

根拠の本質の解明は、根拠の本質を超越に求め、超越によって根拠を根拠づける試みである。このように思索が超越に基づくならば、思索を深めるためには超越についての思索も深めねばならない。これは『根拠の本質について』で現われている。というのは、ここに至って「世界の超越」(SZ, 384)「世界・内・存在の超越」(GA24, 429) という、世界への超出に加えて、全体としての存在者の直中に在るということが超越の契機として挙げられているからである (WG, 45)。このことは、ハイデガーが全体としての存在者を視野に入れ、現存在をその直中に据えたことを示している。とすれば、これは『存在と時間』での存在一般の意味への問いに対しても新しい視野を開いたことになろう。

『存在と時間』では、現存在の存在の意味として時態を釈義し、時態の根源的時熟の解明によって時間を顕在化させ、そして時間から存在の意味規定を明らかにするという歩みが採られた。この歩みの中で存在者が総括的に分析の視野に入るのは第一部第三編「時間と存在」においてである。すなわち「可能的な内世界的存在者の存在論」を展開し、なおかつ「世界構造一般とその可能的な諸転化態とを具体的に仕上げる」ことは、時間を顕在化し、存在一般の理念を解明した後でなされることになっていた。『存在と時間』「前半部」はそう予告している (SZ, 366)。これに対して『根拠の本質について』では、全体としての存在者を視野に入れ、その在り方を世界として捉える (WG, 36)。これは次のことを示唆している。

先ず『根拠の本質について』で提示されている世界に関する問題——世界構造の問題と現存在の世界関与の問題 (WG, 37)——は「時間と存在」で予定されていた課題である、と考えることができる。しかし、この課題は存在一般の理念の解明と時間の顕在化を必要としていたが、未だそれは遂行されていない。したがって『根拠の本質について』では超越の時節的釈義を考察から外さざるをえなかったのである (WG, 41 Anm. 60)。次に、全体としての存在者の在り方である世界は、そうした存在者の存在体制 (何で在り・いかに在るか) としての存在である。また、根拠づけから発現する根拠は「自由だけが現存在に或る一つの世界を主宰させ、世開 (welten) させることができる」(WG, 44) ための根拠である。つまり、世界 (存在) の開示を可能にする根拠である。したがって超越論的根拠で存在の了解 (開示) を可能にする地平が意図されてい

ると言えよう。『存在と時間』では存在了解の地平として時間が顕在化されるはずであった。しかしここでは時態の根源的時熟は解明されていない。むしろ存在了解は超越に求められ、その地平は根拠づけが発現させる根拠に求められる。[1] しかもそれは、存在一般の本質への問いとして展開されたのである。『根拠』は存在一般の超越論的本質性格である」。「根拠は存在の本質を成す」(WG, 51) というように。これと同じように、存在一般への問いは存在者の存在体制の本質への問いとして把握される (KP, 184)。ここで言う本質とは、例えば『真理の本質について』で語られているような (WW, 28)、動詞的に解された本質現成を意味しない。むしろ存在者の存在体制の本質であれば、存在の根本分節 (現実存在と本質存在) ならびに諸々の存在様態の多様などの統一態であり、なおかつ自らを分節化・多様化しうるものである (Vgl. GA24, 24, 170, 321)。すなわち「存在といったようなもの、しかも自らの内に諸々の分節と連繋を全部包み入む豊さをもった存在一般」(KP, 203) である。本質への問いは存在の一般性あるいは普遍性への問いである。以上を順を追って綴れば、全体としての存在者、その存在体制 (世界)、その本質としての存在一般、その本質としての根拠、その本質としての根拠づけ、となる。この系列の中でハイデガーが形而上学の根本の問いに答える試みは、無ではなく存在者が存在するということを現存在の方から基礎づける試みであると言えよう。つまり、根拠づけ→根拠→存在→存在者という基礎づけ方なのである。

このように根拠づけが根拠の本質とされたことから、根拠づけは根拠の起源として根拠の根拠と成る。しかし既に指摘されているように、[2] 根拠の本質への問いは或る不条理に陥るようにみえる。根拠づけが根拠と成ることによって、発現した根拠は自らの根拠性格を剝奪され脱根拠 (Abgrund) に陥る。同じように、根拠が求められている以上は、根拠の根拠と成った根拠づけも自らの根拠性格を剝奪され、脱根拠に陥るのである。このような評価の仕方が正当であるか否か、それを吟味するためにも、根拠と成るとはどのような事態を指しているのか、これを明らかにしておかねばならない。

三

根拠づけが根拠と成るのは、それが根拠を発現させるからだけではない。むしろ「超越しつつ発現する根拠は自由それ自身に自らを返し置く、そして自由は起源としてそれ自身『根拠』と成る」(WG, 53)。しかも「自由が根拠で在ることは、根拠づけの超越論的分散を根拠づける統一態として自らを規定する」(WG, 53)。これを順序立てて言えば、根拠づけは分散しつつ三つの根拠を発現させる。そして発現した根拠が根拠づけへ遡行することによって、根拠づけは根拠と成り、これによって三分散は統一態として規定される。根拠づけは、根拠の発現では分散し、根拠の遡行では統一態を成すのである。このことはハイデガーが提示した二つの問題が密接に連関していることを示す。彼自身、次のように言う。「根拠の遡行は……了解における循環 (『存在と時間』参照) に現われているように、

最初の問題〔根拠づけあるいは根拠の分散の起源の問題〕と極めて密接に連関している」(GA26, 278)。

右に示唆されている了解の循環[3]とは『存在と時間』によれば「現存在自身の実存論的な先行構造」(SZ, 153) を表現している。これには先づ、了解されたものと、その分節としての解釈あるいは学問的釈義との間の循環が挙げられよう。この場合には先行的に了解されているものが…として分節され、あるいは学問的に概念化される。謂わば明晰に再認される。例えば、この万年筆に関して了解されているものは、今は書くためのものとして、あるいは店頭に並べば売り物として、諸々に分節可能な襞を包み込んでいる。万年筆であれ我々人間であれ、一般に存在者が存在するというように了解されている存在一般も、これと同じように分節可能な襞を包み込んでいる。存在一般の意味への問いではこのような存在一般が理念的に前提されるわけであるが、さらに「存在の意味への問いには……問われているもの（存在）が或る存在者〔現存在〕の存在様態としての問うことへ向かって、反転的にあるいは先行的に関係づけられているという、注目すべき関係性がある」(SZ, 8)。ここで言われている反転とは、投企それ自体の動きを表わしている。つまり、了解は或る可能性を先行的に開示することによって、そのように開示された可能性で在り得ること、すなわち了解自体が存在可能であることを表わしている。例えば、我々が諸々の可能性の中で或る一つの可能性へ向けて己れ投企するとき、自らの存在をその可能性に基づいた存在可能として開示している、すなわち先行的に投企された或る可能性の現存在への「反転」(SZ, 148) によって自らの存在可能を開示しているのである。

確かに右のような二種類の循環は根拠の二つの問題の連関を示唆している。最初に挙げた前提関係における循環は根拠の統一と分散を暗示している。また反転としての循環は根拠の遡行を予示している。しかし、これらの循環が分析されている『存在と時間』第三二節「了解と解釈」は、「日常的現存在の準備的諸分析の道筋に従って、非本来的な了解に即した」(SZ, 148) ものである。ここでは現存在は存在者に頽落しつつ、その存在者から自己を了解する。また、存在者はその諸々の在り方から了解される。したがって了解されているのは存在者である。これに対して根拠の問題では、根拠が存在了解の地平として意図されている以上は、了解されているのは存在でなければならない。このように「了解されているのが……存在者かあるいは存在である」(SZ, 154) ことは、ハイデガーにとって了解が二側面から成り立っていることを意味する。

『存在と時間』第一部第三編の新たな体裁」(GA24, 1) である講義『現象学の根本問題』では存在了解に含まれる投企が二通りに分けられている (GA24, 396f., 437)。存在者をその存在へ向かって投企することと、存在を存在了解の地平へ向かって投企することである。前者では存在者の了解が、後者では存在の了解が可能となる。この区分はプラトンの善のイデアを手掛りにしたものであるが (GA24, 400-402)、翌年の講義『論理学の形而上学的基礎』でも同じく善のイデアに基づいて、そこに「のために (Umwillen)」を

認め、これをもって根拠一般の原現象とする（GA26, 237, 276. Vgl. WG, 40）。彼がこのように善のイデアを引き合いに出すのは「プラトンの一つの根本問題の中を動く」（GA24, 400）ことによって存在了解を可能にする制約を見極めることにあった。すなわち、諸々のイデアとそれらを越え出た善のイデアとの関係に、存在了解とその可能性の制約との関係を見る。諸々のイデアを越え出ることはハイデガーにとって存在を越え出ることである。善のイデアは、そうした存在の了解に明るみを与える光として、存在了解の地平となる。このことは超越論的根拠が存在了解の地平として意図されていたことに確証を与える。また、存在者から存在へ、そして存在からそれを越え出た地平へ向かう構想は、我々にマックス・ミューラーの報告[4]を想起させる。それによれば、ハイデガーは『存在と時間』第一部第三編の最初の体裁のときに存在論的差別（Differenz）に二つのものを別弁しようとした。一つは存在者とその存在態との区別であり、一つは存在者およびその存在態と存在それ自身との区別である。この報告を念頭に置けば、ハイデガーが投企を二通りに分けた主旨は、超越に基づく差別の解明にあったと言える。すなわち、存在者からその存在への投企では存在者とその存在体制との区別が、存在から存在了解の地平への投企では存在者およびその存在体制と存在それ自身との区別が企てられているのである。

右のような二つの区別の構想は超越を根拠づけとした本質への問いにも垣間見ることができる。存在者とその存在体制との区別は現存在が世界へ向かって存在者を超出することに求められる。ハイデガーはこの意味で「我々は前もって存在論的差別の根拠を現存在の超越と呼ぶ」（WG, 16）とする。さらに存在体制と存在それ自身との区別は存在体制とその本質としての存在一般との区別として、その区別の可能性は存在一般の本質に見ることができよう。すなわち全体としての存在者の存在体制である世界を可能にする超越論的根拠である。勿論ハイデガーはこの意味での差別を語っているわけではない。講義『現象学の根本問題』で初めて語られた存在論的差別という術語は「存在一般と存在者との区別」（GA24, 322）を表わすが、これは諸々の存在体制と存在者との区別のことである。存在一般という理念[5]はそれら諸々の存在の分節態や様態を包含したものだからである。しかしその一方で、存在の一般化への問いという観点からすれば、ハイデガーの意図あるいは構想を次のように理解できるのではないか。すなわち、超越において存在者を越え出てその存在体制を超越論的根拠（存在了解の地平）へ向けて投企することは、存在体制を存在者から区別（存在者とその存在態との区別）すると同時に、存在体制を一般化（存在者およびその存在態と存在それ自身との区別）することでもある。というのは、ハイデガーにとって存在了解の地平とは、存在一般の了解の地平であり、存在の一般化の地平として、したがって存在の分節化や様態化の起源となる地平として考えられていたからである。さもなければ、そもそもそうした地平から諸々の存在様態の意味規定を統一的に釈義することはできないことになろう。例えば次のように語られている。「本質存在と現実存在との起源を挙示することは今や、これらの概念で名

づけられているものの了解と解釈の地平を明らかにすることを意味する」（GA24, 142. Vgl. 323）。このように見れば、存在了解の地平としての超越論的根拠こそ、一つには諸々の存在体制を包含した存在一般を存在者から区別し、なおかつ諸々の存在体制からその本質としての存在一般を普遍化し区別する根拠である、と言えよう。我々は根拠の問題に関して、了解の循環を後にして存在論的差別に注目しよう。

四

超越論的根拠が存在論的差別の根拠であれば、根拠づけが根拠を発現させることは差別の根拠を発現させることに他ならない。このような根拠づけの分散と統一の問題についてハイデガーは一つの指図を与えている（WG, 51）。それによれば、三重の根拠づけは関心から発現し、関心は時態によって可能となる。『存在と時間』では、時態は関心の意味として関心の構造分節――もとに存在することとして・それ自身に先立って・既に内に存在すること――の統一態を可能にする（SZ, 324, 327）。したがって彼は、時態の統一的時熟が根拠づけの三分散の統一を可能にする、と示唆しているわけである。これが示唆に留まるのは、先に見たように『根拠の本質について』では超越の時節的釈義が考察から外されているからである。講義『現象学の根本問題』でも「存在了解の時節態」すなわち「時態そのものの最も根源的な時熟」の解明は遂行されていない（GA24, 429）。ハイデガーにとって超越における「存在一般の了解と時間との連繋はなお闇に包まれている」（GA26, 254）のである。とすれば、根拠に関する二つの問題もこのような闇に包まれた領域に帰属することになる。したがって我々としてもその領域に直接立ち入ることはできない。むしろ別の側面から把握せざるをえない。それが、超越論的根拠は存在論的差別の根拠であるという側面である。

この側面からの把握は既に試みられている。[6] それによれば、存在と存在者との区別は創設（存在）と地盤獲得（存在者）との統一的分散によって可能となり、そして存在と存在者との区別の統一から基礎づけが発現する。この解釈では、差別が存在と存在者との区別であると共にその統一でもある、ということが前提されている。その上で存在と存在者との区別とその統一に、根拠づけの分散と統一を対応づけているのである。確かにハイデガーは後になって区・別（Unter-Schied）ということを存在と存在者との間・隔の次元と捉え、双方の向かい合いと隔たり合いとを共に思索することへ到達する（US, 25）。しかしこの時期に彼が目指すのは「存在を存在者から際立たせ、存在それ自身を解明すること」（SZ, 27）であり、「端的な超越者」（SZ, 38）である存在を開示することである。したがって存在論的差別は専ら存在と存在者との間の区分（Scheidung）を標示しているのである（GA24, 22）。

対応関係が可能なのは、むしろ、根拠づけと関心とであった。確かにそうだとしても根拠づけが差別の根拠を発現させる点からすれば、根拠づけは自らを分散させざるをえない必然性を持っているの

ではないか。言い換えれば、根拠づけは関心が三つに分節しているが故に三つに分散するのではない。むしろ、存在と存在者とは互いに区別されうるものであるが故に分散せざるをえないのである。というのは、超越論的根拠が差別の根拠であれば、それは存在の開被態と存在者の顕現態とをそれぞれ可能にしうる地平でなければならないからである。この故に講義『現象学の根本問題』では存在了解の地平が存在をも越え出た地平とされたのではないだろうか。存在をも越え出るが故に、そうした地平は存在の開被態と存在者の顕現態とに自らを「分岐」(WG, 15. KP, 115) し、各々を区分することができるのである。すなわち、根拠づけは存在の開被態を可能にする地平へ、また全体としての存在者の顕現態を可能にする地平へ分散せざるをえない。前者は可能性としての根拠であり、後者は地盤としての根拠である。この場合に各々の根拠が単独で存在と存在者とを開被し顕現させるわけではない。むしろ存在と存在者とが区別されたものとして開示されるのは、創設と地盤獲得との統一態が基礎づけを「共に時熟させる」(WG, 47) という、三分散の統一態においてである。

この点についてハイデガーは慎重な言い回しをする。我々はそれを三種類に整理することができよう。先ず、「根拠づけは世界投企、存在者の中で捕われていること、存在者の存在論的基礎づけへと超越論的に発現しつつ三重に分散する」(WG, 50)。次に、「存在論的真理として自らを形成する基礎づけは……振り上げ〔創設〕と剝奪〔地盤獲得〕との統一態に基づく」(WG, 51)。最後に、「超越そのものが……基礎づけ的である。この〔超越の〕なかで存在と存在体制とが開被されているが故に、超越論的基礎づけは存在論的真理を意味する」(WG, 48)。

既に明らかなように、ハイデガーは三分散の一項として「存在者の存在論的基礎づけ」を挙げ、その一方で「超越そのものが基礎づけ的である」とする。前者の分散においては、基礎づけは超越論的根拠としての証しを発現させる。言い換えれば、存在者を存在論的真理によって証示することを指向する。後者では、「三つの仕方の根拠づけが帰属する超越」(WG, 44) が基礎づけ的であると言っているのである。そして前者から後者への謂わば移行は分散の一項としての基礎づけが、分散の統一化において自らを存在論的真理として形成することにある。ここで言う存在論的真理とは存在の開被態のことである。したがって根拠づけの統一化の中で存在は存在者とは区別されたものとして開被されるのである。だからこそ統一的超越そのものが基礎づけ的となり、この「超越論的基礎づけ」が存在論的真理となることができるのである。

超越が基礎づけ的となり、存在論的真理となることによって、存在論的真理もまた基礎づけ的となる。「存在は先行的に了解された存在として、もともと、根源的に基礎づける」(WG, 51)。了解された存在とは、根拠づけが発現させる根拠に基づいて開被された存在、すなわち世界である (GA26, 282)。それが根拠に基づいて開被されるが故に、存在は根拠性格を持ち、存在者を基礎づけることができるのである。ところで、根拠づけの分散が統一態として規定

されるのは根拠の溯行によってであった。したがって根拠づけの統一態のなかで存在が存在者とは区別されて開被されるのも根拠の溯行による。根拠が溯行し、これによって存在は根拠性格を持って基礎づける存在として開被されるのである。我々はこの点を根拠の一側面として挙げておこう。ではこれに対して、根拠の分散的発現においては存在は根拠性格を持たず、未だ開被されていないと言うべきであろうか。我々はここで分散において発現する超越論的根拠と無との相違を明確にしておかねばならない。というのは、根拠を発現させつつ存在者を越え出ることは、ハイデガーによれば、無の内に保持されていることだからである。

五

『根拠の本質について』第三版（一九四九年）への序言の中で（WG, 5）、ハイデガーは『根拠の本質について』で語られた存在論的差別は存在と存在者との間の「ない（Nicht）」であり、『形而上学とは何か』で熟思された無は存在者のないであり、存在者から経験された存在だとする。我々は差し当りこの相違を次のように言うことができよう。先に指摘したように存在論的差別の根拠は超越論的根拠であった。したがって超越論的根拠は存在の開被態と存在者の顕現態との間にあって、双方を区別し可能にするものである。これに対して無は、存在者の顕現態を可能にするものである。すなわち、無は全体としての存在者を無とは端的に異なるものとして指示し、無それ自身は無化することによって「存在するものとしての存在者の顕現態を人間的現存在に可能にする」（WM, 35）。したがって無の本質である無化は存在者の顕現態の可能性として、存在の開被である。すなわち「存在者の存在の中で無の無化が生起する」（WM, 35）。以上のように、無と超越論的根拠との相違は、無はその本質において存在者の顕現態を可能にする存在の開被であるのに対して、超越論的根拠は存在の開被態をも存在者の顕現態から区別して可能にすることにある。

しかし一九二九年の時点でこの差異が整然と思索されていたわけではない。いやむしろ、著作の上で二つに分離され、双方の連関こそ明かされていないのである。そこで第三の著作『カントと形而上学の問題』からの一節を引いてみよう。「無ということが意味しているのは、存在者ではないもの、にもかかわらず『或るもの』である、ということである。無は……その本質において純粋な地平である」（KP, 114）。純粋な地平とは超越の地平のことである（KP, 111）。例えば超越が世界への超越であれば、超越の地平は世界である。すなわち「世界地平」（WG, 45）であり、存在という地平である。これに対して無を或るものとみなし、更に地平として捉えたハイデガーは次のように続ける。「存在論的認識は超越を『形成』し、超越の形成は地平を空け開いて保持することに他ならず、この地平の内で存在者の存在が看取可能となる。もし真理が…の不伏蔵態を意味するならば、超越は根源的な真理である。しかし、真理それ自体は存在の開被態と存在者の顕現態とに自らを分岐せざるをえない

（注、『根拠の本質について』参照）」（KP, 115）。これは先の引用と同じく、カントの超越論的対象に関する解釈の中で述べられたものである。ハイデガーにとって超越論的対象は存在論的認識によって認識されるものである。それは存在者ではない無であり、そしてこれが地平とされているのである。因みに右の引用でハイデガーが参照箇所に挙げているのは次の一節である。「このように必然的に存在者的・存在論的に分岐された真理一般の本質は、この〔存在と存在者との〕区別の裂開と一つにのみ可能である」（WG, 15）。

ハイデガー自身、注で指示しているように、存在論的差別の裂開は超越にある。しかしこの場合には超越が形成する地平は無とされているのである。とすれば、存在論的差別の根拠は無となり、無と超越論的根拠との差異はなくなることになる。しかし、我々はここで「或るもの」という概念に注意したい。

引用文からも判るように、ハイデガーが無を純粋な地平とみなすのは、無が存在者ではないという理由によるのではない。むしろそれが或るものだからである。ここからすれば、或るものとは超越が形成する地平を指している、と考えることができる。超越によって形成されるもの、あるいは超越論的認識によって認識されるもの、それは何らかの或るものだからである。したがってハイデガーは件の箇所で、無を中心にして語っているのではない。むしろ或るもの即ち地平を中心に据えて思考しているのである。すなわち、超越が形成するものは存在者ではないもの、つまり無である。しかしそれは超越によって形成されたものである以上は、何らかの或るものである。それ故、無はその本質において純粋な地平だとされるのである。このように理解すれば、根拠づけが発現させる超越論的根拠も、或るものとして、存在者ではない無を意味する。しかし我々がここで地平を中心に据えて述べたことは、翻って、ハイデガーが『形而上学とは何か』の中で語る無の顕現が地平の顕現に等しいことを意味するのだろうか。この点を根拠の溯行から考えてみよう。

六

根拠の溯行によって生じるのは、根拠づけが根拠と成り、存在が根拠性格を持って基礎づける存在として開被されることであった。この場合に基礎づける存在とは、了解された存在、世界である。したがって、根拠づけの統一的生起は世界の世開であり、世界・内・存在の生起である。発現する根拠が存在者ではない無であれば、無としての根拠の溯行に基づいて存在としての世界が世開されることになる。ハイデガーはこの点について無としての世界と存在としての世界との対比は述べているが[7]（GA26, 252）、根拠の溯行については世界・内・存在における自己態の側から説明されるに留まる。つまり、我々が求めている無の顕現との連関の中で語ってはいない。ただ、「無の顕現態がなければ、いかなる自己存在も、いかなる自由もない」（WM, 35）という一節が我々に示唆を与える。

ハイデガーが現存在の自己態の成立を一方では世界・内・存在に求める所以は、現存在の自己了解が世界への超出に基づいて可能と

なる、という点にある。現存在は世界へ超出し、そして自らの世界から自らに立ち返ることによって自己態が成立する。それ故、世界への超出は自己態を巡ってまたそのために遂行される。すなわち、「のために」の超出である（WG, 43）。このような「のために」を根拠一般の原現象とみなすハイデガーは、それ故に次のように語る。「根拠といったようなものの起源は現存在が〈自己自身のために〉へ脱出することにある」（GA26, 276）。したがって根拠づけから発現する根拠は、現存在が自らの世界を世開させ、自己として存在し得ることのために発現させた根拠である。根拠が根拠づけに遡行するのもこの点にある。このようにして「〈のために〉は〈自己自身のために〉として打ち返してくるものであるが故に、根拠への自由は本質必然的に根拠の根拠である」（GA26, 277）。

右のように自己態という観点からすれば根拠の遡行の由来は「自己自身のために」にある。しかし、自己態の可能性が更に無の顕現に求められているとすれば、根拠の遡行の由来も無の顕現態にあることになる。しかしここで、自己態の形成としての世界への超出と、無の内に保持されていることは、いずれも現存在の超越のことであり、双方は同義的である、と言われるかもしれない。そうだとすれば、無の顕現にまで由来を求めることは無意味になる。しかし、無の内に保持されていることが現に・在ることを意味するならば（WM, 35）、事情は異なる。というのは、ハイデガーにとって現と世界とは同義的ではないからである。双方は不即不離な関係をもつ。「現の開示態の中で世界が共に開示されている」（SZ, 365）のである。

『存在と時間』によれば、現は「明け透き（Lichtung）」（SZ, 133）であり、世界は現存在がその内で実存する所である。現は現存在の存在が明け透かされていることを示す。これに対して世界は、手許に在るものの存在である振り向け（Bewandtnis）の全体として、「手許に在るものの連関を可能にする範疇的全体」（SZ, 144）である。[8] それ故に世界の開示は、振り向け全体が最終的第一次的に依拠している現存在の「それのために（Worumwillen）」へ向けて、現存在が可能性を投企することに基づく。したがって世界は「その都度の世界の開示態」（SZ, 297）である。世界はその都度可変的である。これに対して、現は現存在の存在の明け透きとして世界の可変性を貫いている。この関係は脱自としての時態とその地平的図式との連関に還元される。「脱自的時態は現を根源的に明け透く」（SZ, 351）のであり、世界はその地平的図式によって可能となる。それ故、「現存在が自らを時熟させる限り、或る一つの世界もまた在る」（SZ, 365）とされる。したがって、現はその都度の或る一つの世界の存在根拠であって、その逆ではない、と言えよう。

ハイデガーが超越の契機を二つ挙げたことは、現と世界との相違を『存在と時間』以上に明確に捉えることへと促したのではないか。というのは、全体としての存在者の直中に在ることは、『存在と時間』で言えば現の中への被投態を意味するからである。現に・在ることは、全体としての存在者の直中に在って、それを越え出て無の内に保持されていることへと撤底化されるのである。したがってこ

こでは、世界が全体としての存在者の存在体制であるのに対して、現は現存在の「無という座」(WM, 38) となる。

このような現と世界との峻別はその一方でハイデガーに新たな問題を引き起こした。それは、現に・在ることの存在了解と、世界投企として形成される存在了解との連関である。『存在と時間』であれば「存在一般の開示態は、現存在の存在が〈それのために〉と有意義性（世界）へ向かって一つに投企されていることに存している」(SZ, 147) というように、存在了解は専ら投企の側面で考えられていた。しかし存在了解を形成する超越が二つの契機を持つならばそれに応じて考え直されねばならない。現存在が全体としての存在者の直中に在ってそれに差し向けられていること、それ故に存在者の存在を投企せねばならないこと、ハイデガーはこれを存在了解の困窮と呼ぶ (KP, 206)。現に・在ること、無の内に保持されていること、これは存在了解の困窮を意味する。困窮の中では全体としての存在者が無と一つに出会われているならば、かような無は、根拠づけが発現させる根拠と同一視できない。無も根拠も存在者ではないという意味では同じ無である。しかし、無の顕現は存在了解の困窮として、現存在が存在者の存在の投企へ、したがって或る世界の創設へ向かうことを引き起こすものである。すなわち、自己態を可能にするものである。これに対して根拠は、このような世界への超出が無の顕現の中へ発現させた或るものである。根拠は存在としての世界を世開させるが、しかし無という座としての現は根拠によって開かれるのではない。このように見れば、我々は次のように言っても良いだろう。現は現存在の無という座であり、世界はその座の上で現存在がその都度住まう我が家であり、超越論的根拠は我が家を造るために自ら調達した支えである。

以上のように、根拠の遡行はその由来を自己態の「のために」に持つばかりか、これは更に無の顕現によって可能となった。したがって根拠の遡行および根拠づけの統一化の起源は、無の顕現にあると言えよう。無の内に保持されているが故に、根拠づけは世界・内・存在のために根拠を発現させ、またその故に根拠は「自己自身のために」へ遡行するのである。ここに含意されていることは次の一点である。それは、現存在は根拠を発現させることによって無の顕現に対して存在の開被を断ち切ってそれを獲得する、という点である。言い換えれば、無と存在との接点は根拠にある。根拠はこのような接点としてそれを自らの折り返し地点にして根拠づけへと遡行するのである。

このように根拠の発現とその遡行は根拠づけそれ自体が引き起こしたものではないが故に、根拠づけ及びそこから発現する根拠も共々に、自らを基礎づけうる根拠を剝奪されている。つまり、脱・根拠に陥るのである。ハイデガーが根拠の遡行および根拠づけの分散の統一を問題として挙げたのは、脱・根拠の由来すなわち無の顕現と根拠と存在との連繋が、根拠の本質への問いの内部では十分に思索しえない事象だったからではないだろうか。というのは、根拠の本質への問いは先に示したように現存在の根拠づけを起点にして根拠、存在、存在者、と辿る思索であったからであるのに対して、問

題が生じて来た地点は、全体としての存在者の方にあったからである。すなわち、全体としての存在者、それと一つに出会われる無、そして存在と根拠、という方向である。

七

我々が右で述べた脱・根拠に対して、ハイデガーが「のために」に即して根拠づけは根拠と成り、なおかつ「自由は現存在の脱・根拠である」(WM, 53) と語るとき、これは確かに不条理に見える。しかしここで言う脱・根拠とは、根拠づけが無制約的な根拠ではなく、制約された根拠であることを示す。[9] つまり、根拠の剝奪という意味ではない。すなわち、現存在は自己の世界を世開させることによって、却ってそれ以外の諸々の可能性が剝奪され、その選択も有限的となる。現存在自身が世開させた世界が、現存在を拘束するのである (WG, 52)。「世界としての拘束」(GA26, 254) である。したがってこの場合の脱・根拠は、根拠づけが、根拠づけ→根拠→世界→根拠づけ、といった制約の連鎖を成していること、そしてこの連鎖が根拠の溯行現象であること、を示唆しているのである。この意味で根拠が脱・根拠であることは不条理というより、制約の連鎖の中にあっては条理に適っているとも言えよう。問題はむしろ、このような根拠づけの成す連鎖の統一的生起それ自体が脱・根拠に陥り、それを基礎づけうるような根拠を求めるのは、地球を支える象を考え、更にそれを支える云々といったことになるのではないか、という点である。しかし、形而上学の根本の問いはそうした根拠を求めているのではないだろうか。

ハイデガーは「形而上学とは存在者を越え出て問うことであり、存在するものとしてまた全体として捉えるために存在者を取り戻すこと」(WM, 38) だとする。存在者を越え出て無の内に保持されていること、すなわち現に・在ることにおいて、「存在者が存在し、無が存在しないこと」(WM, 34) が生起するならば、「形而上学は現存在における根本生起である」(WM, 41)。したがって、形而上学の根本の問いで存在者が存在して無が存在しないことの根拠を問うことは、現に・在ることの根本生起の根拠を問うことに他ならない。では、このような生起における根拠づけ自体が自らの根拠を剝奪されているならば、超越論的根拠は形而上学の根本の問い及び存在一般への問いに満足のゆく答えを与えていないことになるのだろうか。

超越論的根拠は存在一般への問いの脈絡では、存在了解の地平として企てられた。それは存在をも越え出た地平であり、存在と存在者を区別する根拠であった。『根拠の本質について』を見る限り、この企ては成功しているように思える。しかし「意図あって分離しておいた二つの著作」(WG, 5) のもう一方である『形而上学とは何か』からすれば、或る困難を孕んでいるのではないか。

二つの著作に分離された無の顕現と存在（世界）の開被との相互連関について、ハイデガーは「無は存在者の存在に帰属するものとして自らを開被する」(WM, 39) と語る。しかし我々の見たところ

では、無の顕現と存在の開被は或るものとしての根拠で結ばれていた。無の顕現の中で根拠づけは根拠を発現させる。と共にこの根拠へ向かって存在者の存在が投企されることによって、世界が世開させられるのである。したがってこの世界は根拠から了解された存在であり、構造から言えば「現存在の〈のために〉のその都度の全体性」(WG, 39) である。とすれば、発現した三つの根拠はそれらの統一態において或る一つの世界として世開することになる。このことは超越論的根拠が存在了解の地平として企てられたことに疑問を投げ掛ける。すなわち、超越論的根拠が或る一つの世界として世開するならば、それが世界を可能にする制約だとしても、存在をも越え出た地平にはなりえないのではないか。むしろこの場合には存在了解の地平は存在者ではない無としての根拠にある。無の顕現の中へ発現された根拠は、無と同じように、「存在者のない」であり、「存在者から経験された存在」すなわち世界である。したがってそれは、存在をも越え出た地平へは到達しなかったと言えよう。とすれば同じ理由から、存在論的差別も存在は存在者ではないという仕方で遂行されているのである。それでは、このような超越論的根拠は形而上学の根本の問いにどのような答えを与えたのだろうか。

ハイデガーが存在を根拠として思索しようとするならば、形而上学の根本の問いで求められている根拠は、彼にとっては存在である。この場合の存在とは存在者の存在体制ではなく、存在一般である。「『根拠』は存在一般の超越論的本質性格である」(WG, 51) と語られているからである。すなわち、存在一般は超越論的根拠を「なぜ」の答えにして、無ではなく存在者が存在することを基礎づけるのである。しかし、『根拠の本質について』で基礎づける存在として挙げられたのは、了解された存在、すなわち存在体制としての世界である。そして世界を世開させる根拠が、超越論的根拠であった。とすれば、超越論的根拠は存在体制の根拠にしかなりえないのだろうか。

本質への問いでは存在体制の本質が存在一般とされていた。ハイデガーはこの相違を次のようにも語っている。「存在者をその当の本質と在り方で存在させることができるためには、実存する存在者は出会われるものをその都度既に、存在者が存在するということへ向かって投企してしまっていなければならない」(KP, 206)。ここで「本質と在り方」は存在体制であり、「存在者が存在すること」は存在一般[10]に対応する。ハイデガーは右の引用文中で明らかに、後者の「存在者が存在すること」の投企の先行性を主張している。これは、存在一般の先行的投企、そしてかように投企された存在一般を諸々の存在体制に分節化する投企、これら双方の相違を示しているのである。したがって無の無化における「存在者が存在し、無が存在しない」ということで、諸々の存在体制を自らの襞として内に含んだ存在一般のことが語られているのである。先に見たところでは、無の顕現からこのような存在一般を断ち切って獲得するものこそ、超越論的根拠であった。この限り、超越論的根拠は形而上学の根本の問いに答えを与えている。しかし、超越論的根拠は無の顕現と存在の開被との接点であるが故に、一面では答えを与えているに

もかかわらず、他面では「なぜ」を発現させるのである。「無の顕現に基づいてのみ『なぜ』という問いが発現する」(WM, 41)。形而上学の根本の問いでは、問われているものの問うことへの打ち返しによって、問うことそれ自体の脱・根拠が証された。問うことの脱・根拠は根拠づけの脱・根拠であり、これはまた「存在者が存在し、無が存在しないこと」の脱・根拠である。これらは同一の生起だったからである。この限り形而上学の根本の問いはハイデガーにとって依然として問いとして残されているのである。彼はこのような二側面を次のように語っている。存在者ではない無としての根拠から了解する「存在了解は、予めなぜを可能にする」と同時に「最も先行的な答えとして最初で最後の基礎づけを直ちに与える」(WG, 48)。

以上のように、根拠への問い、存在一般への問い、存在論的差別の構想、存在了解の地平の投企、これらについてハイデガーは自らの意図を十分に成就することができなかったと言えよう。その理由は、既に指摘したように現存在の超越に基づいた思索様式自体に難があったのかもしれない。しかしハイデガーがその当時に思索様式を真先に吟味し直したかと言うと、そうではない。彼は思索されねばならない事柄の方へ向かい、無という座を暖める者となった、と言えるのではないか。というのは、そこに彼の問題の所在があったからである。それを示唆しているのが根拠の溯行と根拠づけの分散統一の問題に他ならなかった。我々はここに一九三〇年代の彼の思索の道筋の端緒を見つけることができる。すなわち、無という座すなわち現に留まり、全体としての存在者から無と存在と根拠への連繋を問う、という道である。

(昭和五九・一一・一五)

※ハイデガーからの引用の場合、その略記号は次の通りである。なお、引用文中の〔 〕は引用者による補足である。

(SZ) *Sein und Zeit*, 1927, 12. Aufl., 1972.
(WM) *Was ist Metaphysik?* 1929, 10. Aufl., 1969.
(WG) *Vom Wesen des Grundes*, 1929, 5. Aufl., 1965.
(KP) *Kant und das Problem der Metaphysik*, 1950, 3. Aufl., 1965.
(EM) *Einführung in die Metaphysik*, 1953, 2. Aufl., 1958.
(WW) *Vom Wesen der Wahrheit*, 1943, 5. Aufl., 1967.
(US) *Unterwegs zur Sprache*, 1959, 5. Aufl., 1975.
(GA) *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, 1975 ff.

注

(1) 存在了解の地平が根拠とされる点については、次の一節からも明らかである。「存在の意味は最も縛れたものであり、存在の根拠は闇に包まれている」(GA 24, 318)。これを受けて「存在の意味と存在了解の地平を明らかにすること」(GA 24, 319) とされる。ここでは意味が根拠ではなく、存在了解の地平が根拠とされているのである。

(2) Vgl. Otto Pöggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, Neske, 1963, S. 159–162.

(3) 了解の循環については、John C. Maraldo, *Der hermeneutische Zirkel*, Symposion 48, Karl Alber Freiburg/München, 1974, S. 81–121. を参照。なお著者は『存在と時間』での循環の根拠を後の解釈学的関与 (US, 150) あるいは不伏蔵態としての真理に求めているが、

本稿ではその点には立ち入らない。

(4) Vgl. Max Müller, *Existenzphilosophie im geistigen Leben der Gegenwart*, 2. Aufl., Heiderberg, 1958, S. 72. なお本稿では神学的差別については触れていない。

(5) 存在一般という理念には「何で在り・いかに在るか、或るもの、無、ないを具えた状態」が含まれる（WG, 52）。

(6) Vgl. Alberto Rosales, *Transzendenz und Differenz*, Phaenomenologica 33, Den Haag, 1970, S. 247-281, insb. 254, 269, 277, 281.

(7) この点については、茅野良男「ハイデガーにおける思索の転回の端初（上）」（『現代思想』青土社、一九八一年一号、二二一—二三九頁）を参照。

(8) 本稿では世界と、実存疇としての世界性（SZ, 64）、有意義性との連関には立ち入らない。世界および無の問題については、辻村公一『ハイデッガー論攷』（創文社、昭和四六年）を参照。

(9) Vgl. Kuschbert-Tölle, *Martin Heidegger Der letzte Metaphysiker?* Monographien zur philosophischen Forschung Bd. 180, Forum Academicum, 1979, S. 130f. なお、『根拠の本質について』の中で言われている根拠の「非・本質（Un-wesen）」についても、脱・根拠と同じく、制約された有限な状態のことを示している。これに対して本稿で根拠の剝奪という意味で用いる脱・根拠は、「原生起としての超越が已れを時熟させるということ、これは自由それ自身の力に依るのではない」（WG, 54）という事態を示している。

(10) 引用文中の「存在者が存在すること」は『形而上学とは何か』で語られた「存在者が存在し、無が存在しないこと」と同じであって、本質存在と区分された現実存在を意味しない。現実存在についての問いは「それぞれ特定のこの本質存在を持った存在者は、存在するのかしないのか」（KP, 202）であり、講義『現象学の根本問題』では現実存在は一つの在り方とされている（GA24, 24）。したがって存在体制（何で在り・いかに在るか）に含まれている。